

ボハラของタラビ叛乱に関する中国史料

岩 村 忍

ボハラは 1220 年、チンギス・ハーンの西域遠征によって破壊されたが、約 10 年後のオゴダイ・ハーンの初期には昔日の繁栄をとりもどしたといわれる。しかるにこのオアシス都市においては貧富の差がはなはだしく、社会的不安定が醸成されたのに加えて、ボハラ城市とその附近に散在する村落オアシスとの関係も対立的であった。ボハラของモンゴル支配初期の情况は明かでないが、中国人 Chonksān Tāifū¹⁾ と西域人財政家として有名な Maḥmūd Yalawāči²⁾ とその子 Mas'ūd Beg が治めていた。このボハラとその周辺の小オアシスとの対立の原因ははっきりしないが、おそらくはこの地方における大土地所有、不在地主制にもとづくものではないかと推測される。それはともかくとして、このような対立関係の一つの現れが、Tarabī 叛乱³⁾ であった。

ボハラから 12 km ばかり離れたところに Tarab という小オアシスがある。この村の篩職人に Maḥmūd というものがあり、奇怪な術を使い、予言や透視や病気の治療を行なって、民衆の帰依をえた。こうして近隣に勢力を扶殖したので、ついにボハラ總督をしていた前記のマスード・ベックも看過することができなくなり、マフムードを欺いてボハラに招致して処刑しようとした。ところがこの術師はその裏をかいて、多数の帰依者を率いてボハラに入り、この都市のイスマイリヤ派、スーフィ派や貧民の大歓迎を受けた。やがてマスード・ベックはモンゴル兵の来援を乞い、マフムードの一族と戦った。その第一戦にモンゴル軍は敗退したが、マフムード自身も乱戦のうちに行方不明になった。まもなくモンゴル軍は勢いを盛りかえして来襲し、叛徒を敗り、ボハラに入城し、市民を塗殺、婦女子を奴隷として捕え、市街を滅却しようとした。マスードはこの無益、残忍な処置に強く反対したので、辛うじてボハラは再度の破壊から免るるをえた。これは 1238 年⁴⁾ のことであった。

元代の史料には元朝以外のモンゴル領域に関するものは極めて寥々たる次第である。モンゴル時代中央アジア史においてタラビの叛乱として知られるこの事件もペルシア史家⁵⁾ によって記述されているが、「元史」には全く見出されない。ところが「元典章」

ボハラの人々に関する中国史料

(刑部巻19)の「禁回回抹殺羊做速納」にはこのタラビ叛乱に関する一条が見える。この条は至元16年12月24日(1280年1月27日)の日附のあるいわゆるモンゴル語直訳体であるが、その文章には錯乱、誤写があって読み難い箇所もある。この一文はムスリムが異教徒の屠殺した羊肉をタブーとする習慣を禁止したものである。つぎにタラビ叛乱に関する部分のみを摘記して翻訳、注釈を加えてみたい。

……………這聖旨行，至哈罕皇帝時節，自後從貴由皇帝以來，爲俺生的不及祖宗，緩慢了上，不花刺地面裏，答刺必・八八刺・達魯沙一呵的，這的每起歹心上，自被誅戮，更多累害了人來，自後必闌赤賽甫丁，陰陽人忽撒木丁，麥朮(原文木に作る)丁也起歹心上，被旭烈大王殺了，交衆回回每吃本朝之食，更譯出木速合文字，與將來，卹時節合省呵，是來，爲不曾省上，有八兒瓦納又歹尋思來呵，被(上の2字，原文では前後顛倒)不合大王誅了，卹時節也不省得……………

この文章を翻訳するまえに、文中の固有名詞、難解なことばに説明を与えておきたい。

哈罕皇帝

「元典章」ではチンギス・ハーンはだいたい成吉思皇帝となっており、オゴダイ・ハーンは合罕皇帝、時には哈罕皇帝と記されている。

不花刺

Bukhārā の対音であることはいうまでもなく、「元史」も同様である。

答刺必

Tarabī の対音。ペルシア史家の記事でこの叛乱を記している部分では、術師マフムードを指している。

八八刺

「元史」紀2、表3、4にこの名が見える。西方に封ぜられた諸王である。この名はおそらくはモンゴル名ではなからう。ここではいうまでもなく同名の西域人である。

達魯沙

「元史」に倒刺沙として見える有名な西域人と同名。

一呵的

これはおそらく人名ではあるまい。Ismā'iliya を指す ilḥād の対音かも知れない。イルハードは異端を意味する。本文では「ババラ、ダルシャなど異端ども」というように解すべきであろう。

必闐赤賽甫丁

必闐赤はもちろんモンゴル語 *bičikči* で書記のこと。賽甫丁は *Sayyid-uddīn*.

忽撒木丁

Ḥasan-uddīn.

麥木丁

麥木丁の木は前の忽撒木丁につられて誤ったものだろう。朮が正しいと思われる。

「元史」に屢見する麥朮丁と同名である。麥は *mai*, *mo* であるが「元史」などではたとえば *Ismā'il* を曷思麥里と写している。麥朮丁はおそらく *Mu'izz-uddīn* の対音であろう。

旭烈大王・不合大王

旭烈大王は *Hülegü Qān* で「元史」には旭烈兀、旭烈、呼里兀等と見える。不合大王は *Būqā Qān* で元史は不花と写す。大王とある以上宗室であるが、フラグとかブハという名前はモンゴル語ではきわめて普通の名で、宗室だけでもいくつも算えることができる。その上にこまったことには、合剌旭烈 *Qarā Hülegü* をただ旭烈とのみ写している場合もある。また同様に不合（不花）の形容詞として也先、合剌、帖木兒、乞都等を附したものが見出される。それで本文の旭烈大王、不合大王がはたしてどのフラグ、どのブハに当るかを決定しなければならない。タラビ叛乱の年は異伝もあるが、1238年のほうが正しいと考えられる。そうするとその前後に中央アジアに駐していた人としてはチャガタイ統の諸王である可能性が多い。従ってこのフラグはチャガタイの孫の *Qarā Hülegü* であると考えられる。もっとも後にイル・ハーンになったトルイ統のフラグの可能性も存在するし、不合大王を *Ariq Būqā* に比定する可能性もありうる。あるいは本文の後半がタラビ叛乱から相当後に起きた事件とすると、チャガタイ統の *Timūr Būqā* (*Būqā Timūr*) かも知れない。

木速合文字

これは *muska* (*muski*) の対音にちがいない。もともとギリシア語からきたアラビア語で、音楽特にメロディ作曲の意味に使われるようになったらしい。ここではおそらくは祈禱文のことかと思われる。

八兒瓦納

これは *Barwana* の対音で人名であろう。前出の *muski*, *muska* のように語尾の *i* を *a* にする例はすくなくない。たとえば *Hazāri*, *Hazāra* もそれである。従って *Barwani*, *Barwana* もありうる。

以上で語解をしたから、上の直訳体の翻訳を試みよう。

……この詔を行なってオゴダイ・ハーンの時代にいったが、それから後グユク・ハーン以来は先祖に及ばず、規律がゆるくなったので、ボハラ地方でタラビ、ババラ、ダルシャなどの悪党どもがわるい心を起こしたので処刑され、その上、多くの人々が連累して殺された。その後、書記のサイド・ウッディン、占師のハサン・ウッディン、ムイッズ・ウッディンなどもまた悪心をいただいたので、フラグ・ハーンに処刑され、ムスリムたちもモンゴル流の食物をたべるようにさせられた。また祈禱文を訳してムスリムたちに与えた。ところがその時、反省すればよかったのに、そうしなかったために、バルワナもまた悪心を起こし、ブハ・ハーンに処刑された。その時、反省しなかったわけである……

前の「この詔」というのは、ムスリムに対して食習慣をモンゴル式にさせるという命令である。具体的にいえば、異教徒の手によって屠殺されたヒツジを汚れたとして食べないイスラムの禁忌をやめよという意味のものである。ここでは食習慣上の禁忌はシンボリックなもので、モンゴル皇帝の命令に違反したことを指していることは明らかである。

(筆者は京都大学人文科学研究所教授)

註

- 1) Hammer-Purgstall, *Geschichte Wassaf's*, Wien, 1856, S. 25. チョンサンは丞相、タイフは太傅の対音であるが、その比定は他日稿を改めて述べることにしたい。
- 2) ヤラワチとマスードについては、安部健夫「元時代の包銀制の考究」*東方学報*、京都第24冊、4、2を参照。
- 3) 田中萃一郎「ドーンモン古史」、362—6頁。
- 4) Hermann Vámbéry, *Geschichte Bochara's*, 1872, S. 156 ではイスラム暦630年、西暦1232年となっているが、前後の関係から考えて1238年のほうが正しいとしたい。
- 5) John A. Boyle, *The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini*, Manchester, 1958, pp. 108-111 参照。